



月刊 千葉労働

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号 (動力車会館)

電話 (鉄電) 千葉 2935・2939 番
(公) 043 (222) 7207 番

98.2.26 No. 4741

追悼 宮嶋義勇監督



二月二日、宮嶋義勇監督が急逝されました。享年八九歳でした。亡くなる十日ほど前にも、「身体が動くようになったら百万人署名運動の賛同人を集めようと思つてね、散歩して体を鍛えているんで、近いうちに行くから」との電話を頂いたばかりのことであり、未だに信じられない思いです。

ご家族のお話しでは、繰り返し「動労千葉に行くんだ。そのために足腰を治すんだ」と言つて、ご自宅の周りの散歩を欠かさなかつたそうです。ところが一九日、散歩から帰つて倒れ入院、そして突然の悲報でした。

今となつては、宮嶋監督がこれほどまで、動労千葉に思いを寄せて下さつていたことに對して、お礼の言葉ひとつ返すこともできません。本当にありがとうございます。心からご冥福をお祈り致します。

国鉄分割・民営化に反對して闘われた第二波スト以来十数年、私たちの闘いの現場には、必ず宮嶋監督の姿がありました。全身全霊を注いで動労千葉の闘いを支えて下さつた、と言つても過言ではありません。宮嶋監督の手によつて、動労千葉の闘いは、記録映画「俺

たちは鉄路に生きる」となつて、全国の仲間たちに伝えることができたのです。

宮嶋監督との出会いは、八五年の第一波スト直後のことでした。そのときの事情を監督は次のように話して下さいました。「第一波のストライキをビデオで見たんですよ。いやあ、本当にびっくりした。とにかくまだこの世の中にね、労働者魂っていうものをもっている組合がある。俺は文字どおりプロレタリアでね、何もできないから、せめてできるのは映画をつくることぐらいだつてことで撮りはじめたわけですよ。」

ご高齢にも係わらず、宮嶋監督の情熱は中途半端なものではありませんでした。第二波のストライキでは、組合員とともに職場に籠城し、以降、すべての闘争現場に参加してカメラを回し続けました。撮影は、北海道から沖縄まで全国に及び、その合間に、動労千葉会館に器材を持ち込んでフィルムや録音テープの編集を行うという作業が何年間も続ければ、「俺たちは鉄路に生きる」(第一報、第三報)に結晶したのです。

宮嶋監督の視線は、徹底して労働者の闘いに据えられていました。監督は、何度となく、「あの映画が力をもつたということは、闘いを撮つたからなんです。主役はそつちだつてことを忘れちゃいけない。僕は映画で後を追いかけているんです」と訴えつづけました。また、国鉄 分割・民営化という大きな闘いの山を越えた後も、「今度撮つていく僕の考えとしてはね、労働者魂、階級意識ですね。そういうものを一人ひとりが持つていってかたちを何とかして出していきたい。はつきりした労働者魂が組織化されて、それが新たな闘争に起ちあがつていくんだ、というものを撮つてお役にたてようかと思つていんです」と言われ、撮影を継続されました。

この二、三年は、「僕はね、今医者と闘つていてね。仕事はだめだつて言うんだ」と、笑いながら、ドクターストップをおしてまで、「第四報」の制作に全精力を傾けていました。しかし、未編集の膨大なフィルムだけが残さ

れることになつてしまいました。さぞ無念であつたことと思います。返すがえすも残念でなりません。

宮嶋さんは、撮影監督として輝かしい経歴を歩んでこられました。閉鎖的な職人仕事だった映画の撮影に理論的な支柱を導入し、秀でた撮影技術、映画人としてのずばぬけた力量へ敬意を込めて「宮嶋天皇」と呼ばれ、撮影技術の理論研究や体系化、書物の編纂や映画技術用語の統一、日本で初めての長深度焦点撮影(パンフォーカス)の成功など、多岐にわたる功績により、多くの撮影賞・映画技術賞を受賞されています。

しかし、名譽とか地位などは、宮嶋監督にとつては何ひとつ価値をもつものではありませんでした。監督は最後の日まで、自らの信ずるところを一步も譲らず、労働者の闘いに希望を見いだし、社会の変革を求めて生き、走りつづけました。

宮嶋監督は、「こなかつたのは軍艦だけ」という言葉で有名となつた、戦後最大級の労働争議である(東宝大争議)において、労働組合運動の最も戦闘的な指導者でした。また、一九四九年の東宝退社後は、「映画の良心」を掲げた独立プロ運動の大きな役割を担い、「蟹工船」「夜明け前」「人間の条件」、七〇年安保・沖縄闘争の長編記録映画「怒りをうたえ」三部作など、映画史に残る数多くの名画を撮影されました。

宮嶋監督、あなたが、「怒りをうたえ」にふれて、「相手は世界最大級の帝国主義だから、この闘いは百年戦争というくらいに考えなきゃいけないし、この超長編の叙事詩は、僕が生きている間中ずうと撮りつづける必要があると思つていた。「俺たちは鉄路に生きる」は、未完の叙事詩の続編ですよ」と話されたその言葉込められた想いを、私たちは最大の励ましとことばとして受けとめています。私たちは監督の遺志を引きつぎ、必ずや、国鉄闘争に勝利し、闘う労働運動の新しい潮流の旗を全国に翻すことを誓います。